

1. 越後桂派の概要

越後桂派は江戸時代後期の越後国村上の刀装金工一派のことである。遊洛齋赤文の生家といえればよりわかりやすいであろうか。また越後桂派という呼称については、「刀装小道具講座第6巻」の記述にある通りとした。越後桂派に属する主要な金工としてあげられるのは桂雲軒、桂鷺州、桂赤文、桂南山、桂一明などである。越後国村上の出身である刀装金工の遊洛齋赤文（ゆうらくさいせきぶん）が文政7年に庄内藩酒井家抱え工となり、庄内金工の最後を飾る名工の一人として全国にその名を残した。地方的名工たる遊洛齋赤文は長寿で明治初期の廃刀令直前まで現役で庄内鶴岡で活躍した。作風は浜野政隋風であるが安親を意識して田舎くさい感じではあるも、一見粗雑だがどこか雅味のある作風で見入る人を引き付けてやまないのである。遊洛齋赤文については本間有義、齋藤直芳共著の「遊洛齋赤文考」（昭和41）や3代赤文の書いたとされる「桂野家史」に詳しく研究されているが、その一方で越後桂派の金工（村上住の父、兄弟やその弟子）についての記載については詳細不明な点も多いということであった。越後桂派の金工についての資料が少なかったことと赤文以外は全国的に著名ではなかったことから、その詳細は語られることが少なかったと思われる。今回、越後桂派の金工について既知の内容とそれに若干追加できる新しい内容の資料や地元の人のお話に接することができたので、報告する。



<村上彫り物師肖像>

2. 桂 雲軒、定治、定二、寛敬

赤文の父は村上住の鑄物師元祖 桂 定二または定治（号は雲軒、足利寛敬）という。南山が一明に宛てた家系について記載した書簡、南山が作らせ自ら詳細を記した桂家の人の肖像画、さらに雲軒が記したという寛乗伝法を嘉永5年に南山が写したのものによると、桂家の先祖はもともと足利姓を名乗っていたが、慶長の時代に居住していた岩船郡関桂山にちなんで、しかも足利姓は新田、坂田、桂と同姓という考えから桂姓を名乗るようになったという、その後村上城下に居住するようになった。雲軒は京都で後藤寛乗の門に入り、さらに一宮長常の門人にもなったという。但し、自身銘の作品は未见であることから（作品は全部無銘だったのか無いのか）従来本当に金工だったのかすら不明といわれていた。行年63文化10年ころ没するという。

3. 桂 栄治、鷺州、光長

定治の長男。桂 栄治、または栄二、光長、という、号は鷺州。（正長とも銘したという説があったが、鷺州の弟子で長岡の清家寛七の彫銘が桂正長である。正長銘については今後研究の余地があると思われる。）



<桂 光長 縁頭>

鷺州光長ははじめ父雲軒に学び、その後東都において菊岡光行の門人となり師亡き後菊岡光朝が若かったこともあり菊岡家を離れた。その後埋忠就方、打越弘寿、さらに石黒政常に師事したという。鷺を得意とし安親や政隋を理想としていたようである。初銘、松鶴軒 政壽、埋忠就寿、春鋤亭。没年文政7年、行年44。海蔵寺に葬られる。赤文の9歳年上の兄でしかも鷺州が没した同年に赤文が庄内藩抱え工となっていることは興味深い。村上藩上

町住。弟南山の書いた桂家の系図の書簡によると赤文、南山、一明は鷺州の弟子となっており、一番最初に鷺州に習いその後それぞれの道へすすんだのではなかろうか。村上にて活躍した赤文の兄弟たちはその作風から赤文との技術的交流があった可能性があるといわれてきた。作位は似てやや劣るといったところであろうが、彼らは赤文の協力工であった可能性もありさらに世の中に赤文銘の作品の数の多さと出来のばらつきのあることを考えると一概に劣るなどと言えないだろう。真面目な鑿使いで、デザインが型にはまらずしかも愛嬌のある作品を残している。

4. 竹谷千蔵義明

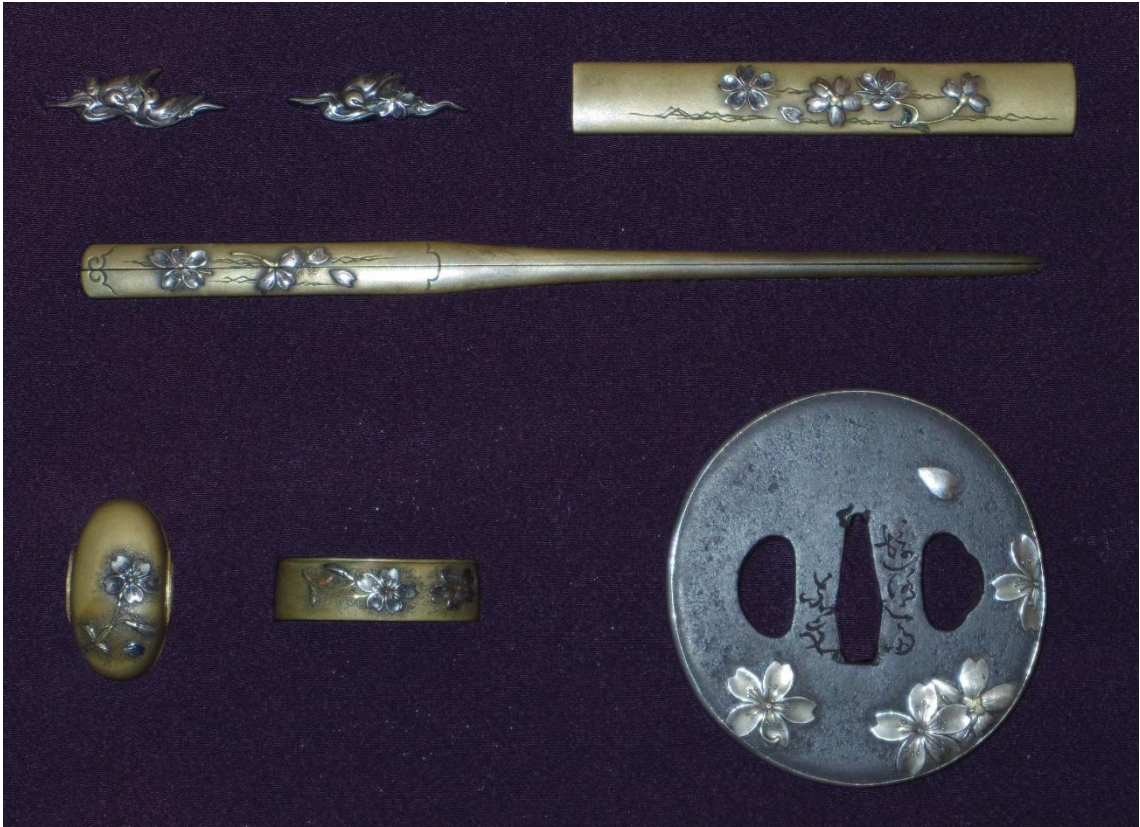
桂 定治の次男、東都において竹谷次郎兵衛という研師の門人となった。この人はいままでの文献に記載なく、赤文は3男ということになる。行年37。研師竹谷次郎兵衛の元へは南山の息子達も弟子入りしているが、桂家と関係が深かったのであろうか。

5. 桂 正蔵（遊洛斎 赤文）

この一派では全国的に有名になった人である。桂 定治の3男。初め鯉水軒、と号し、鷺州に師事しその後東都において玉川政春の門人となり、乗意、利壽を学んだ。鯉が得意だった。遊洛斎、正珉とも号したという。文政7年35歳で羽州鶴岡酒井候のお抱えとなり、その際に桂野と姓を改める。そのことを弟の南山に知らせた書簡が残っている。（内容は鶴岡酒井候にお抱えとなり、下谷新橋通り御下屋敷へ移り・・・村上の知人が江戸で修行などの依頼に、まだ知り合いもなく・・・また、桂野正蔵と変姓のことなどを弟の忠吾（南山）に知らせたもの。）弘化2年56歳で鶴岡新町へ移住する。庄内金工最後を飾る名工の一人である。明治8年鶴岡にて没する。鶴岡市大昌寺に葬る。行年86。



<遊洛斎赤文 縁頭>



<遊洛齋赤文 揃金具>



<遊洛齋赤文 一作拵>

6. 桂 保光 南山

桂 定治の4男で桂 保光、忠吾、号は北子、南山である。元々下地師をやっていた、鷺州門下。虎を彫る、虎の南山として知れる。のちに村上藩六軒町の稲垣 角兵衛を継ぎ、稲垣姓となる。俳諧を能す。南山には息子がいてそれぞれ下地師になったり研師になったりしている。南山の息子は稲垣氏を名乗り、剛吉（研師竹谷次郎兵衛門人）延太郎（研師竹谷次郎兵衛門人）平次郎（下地師彫物師）。それから南山の後、稲垣家は仙吉（骨董商を営む 六軒町住）が継いだという。光濟寺に葬られる。南山は明治初期（6年から8年頃か）没する。行年75という。



<桂 南山翁作 虎図縁頭>

7. 桂 一明、東松齋

村上藩上町の桂定治本家鷺州の養子で鷺州2代目を継いだ優工。国之助、号は東松軒、月枝、桂 一明（かつら いちめい）は初め鷺州門下、のちに赤文に直接入門して弟子となっており、作風は師の一面をうつして、師の代表作もしたであろうくらいに腕の良い巧手であった。村上藩家老鳥居三十郎の大小拵獣尽しの一作金具は代表作の一つ。明治6年ころ没するという。一明亡き後の桂家は一明の娘しげ子の婿である重明が継いだというが、刀装金具を製作したかは定かではない、重明は大正7年に73歳で没している。



<桂 一明 鯉図筭>



< 桂一明一作短刀拵 >

8. 一明の作品との出会い、村上出身の人から聞いた話など

刀装具鑑賞を趣味にして約 20 年が経つが、自分にとって身近な地元の金工には特別な思い入れをもってしまふ傾向がある。他の多くの刀装具愛好家がそうであるように私も地元の良工、桂 一明の密かなファンであった。私と桂一明の作品との初めての出会いは平成 9 年ころに遡る、私はまだ就職して 2 年目、刀装具愛好家として鑑賞や収集の対象物は主に離れ縁であった。当時新潟市にあった古美術店にて見せてもらった初だしと称する無銘の脇差の柄に桂一明の縁頭が付いていた。真黒い良質な赤銅磨地で、縁の腰はさほど高くなく、草花を金銀色絵で象嵌された作品であり、素赤の切羽台に東松齋 一明と銘があった。脇差拵の金具は鍔、目貫、小柄はすでに欠の状態でも脇差の方も錆身でかろうじて直刃の刃紋が確認できる程度、茎は区送り尻切の状態だったと記憶している。私は刀身は欲しくはなかったが、店主が錆身の脇差を含めてでないと譲ってくれないとのことで、値段を聞くと、いい離れ縁 10 個分ほどであったので私に購入できるはずもなかった。人が刀装具を選んでいるようで、刀装具が自分にふさわしい持ち主たる人を選んでいるのかもしれない、当時の私には不相応であった。口惜しさ半分に今思い出すとその脇差の登録証の内容には少し疑問があった。やはりご縁がなかったのであろう。

話は変わるが 10 年くらい前になるが仕事の会話の中で、村上在住の御高齢の女性から桂一明の名前が出たことがあった。私は驚いて「よろしければ知っていることをなんでもお話しください。」という、「一明（いちめい）さんは細工町に居たんだ。」と。それまでは一明は赤文の門を辞したあとそのまま庄内に残って活躍したのかと思っていたので新発見だった。しかし、それ以上のお話は無く私もそのまま忘れかけていた。その後 2013 年に村上市で仕事の関係者との会合で村上市細工町にある料亭に出向いた時、その店のおかみさんが一明を知っていてやはり「むかし細工町に居たひとだ。」と聞いたとのことだった。そういえば村上市の歴史資料館である、おしゃぎり会館に展示してある最後の村上藩家老鳥居三十郎の大小一腰の拵は桂一明の一作総拵である。村上の細工町に桂一明は帰ってきて活躍していた可能性は高いと思う。一明が村上に帰ってきた理由としては一明が桂家の跡継ぎであったことが主だったであろうが、それにしても師匠であり叔父である名工遊洛齋赤文の居る庄内に比べて、一見技術レベルの低いと思われる村上にわざわざ帰って来て活躍していたとしたら、村上に何らかの特別の思い入れがあったからではなかろうか。

また、最近お会いすることが出来たのであるが村上市内在住の稲垣氏は桂南山の親戚の子孫にあたる方である。ご先祖は大工をしていた家系だとのことであるが、越後桂派の書類（赤銅の色揚げ法について記したもの等）が同家に伝わっているという。

さらに今回提示した村上彫り物師の肖像画と南山が桂一明に宛てた桂家の家系についての書簡等は村上市在住の渡辺氏が所有されていたもので、今回幸運にもご縁で拝見させていただくという幸運な機会に恵まれた。その内容は越後桂派を語るに欠かせないものとしての価値があり、何らかの形で記録を残さなければいけないと思い、恐れながらお願いしたところ快く今回の公表をお許し頂けたものである。氏に直接伺った話もあり他には、桂鷲州が

新発田藩の白銀師を自分の村上藩上町にしばらく預かる旨届け出た書類である逗留届出書（これにより村上の上町に桂家本家の本拠地があったことがわかる）、桂家一族連名での瀬波の多岐神社（滝不動）への礎階の資料を2代赤文が記したもの（現在でもその礎階はあり文字がきざまれているとのこと）、南山の下絵帳のコピーなどを閲覧させていただいた。氏の村上関連の越後桂派に対する愛着と熱心な探求とさらにそれを持続させるご努力には驚くばかりである。今回資料をご提示いただいた渡辺氏には心から感謝を申し上げたい。

9. 当時の村上藩

刀剣や刀装具の古文書や、作家の人生、作品を語るにおいてはやはり、村上の歴史、民俗学、宗教、経済状態など、様々な要因が関わっていると考えられる。とてもここで述べてくせないが簡単にではあるが彼らの生きていた時代の村上藩について少し述べる。村上藩は譜代大名の内藤家が藩主の座に安定して久しかった。石高は5万石と小さかったが幕府の信頼は厚かった。また、財政を潤すために三面川の鮭の増産（種川の制）、堆朱工芸、茶栽培、織物（山辺里織）など地場産業的なものを発展させた。

村上の刀工には庄内の池田一秀の弟子で、村上藩鍛冶町の与惣兵衛に入籍し初めの庄司吉道から藤原一成と名を改めた村上藩御用達の刀工がいる。彼は鉄砲の製作も得意とした。村上の某家に一成の刀身の入った、一明の揃い金具の付属した拵を拝見したことがある。

村上藩は幕末には奥羽列藩同盟に加盟して新政府軍と戦うも、村上城内では親幕府派と新政府派が対立した。藩主信民は恭順でまとめようと帰城したが家臣がまとまらず自害。最終的に新政府につくことでお取りつぶしを免れた。明治2年版籍奉還、明治4年村上県となり同年新潟県に合併した。

10. まとめ

今回新潟県村上市の地方金工である越後桂派の初見の内容を含んだ資料を紹介した。「刀装小道具講座」や「遊洛斎赤文考」等の内容と違う部分があると思うが今後の研究にて判断されることであろうと思う。最後に、資料閲覧や渡辺氏の話を開いたりして今回新たに認識した点について箇条書きにする。

- ①桂姓を用いた由来であるが、今までの書籍には述べられていないようである。今回越後桂派が、昔は足利姓であったのを（桂雲軒の代からか）桂姓としたとを確認。
- ②鷺州の若銘のひとつに政壽があった。（赤文一派の政壽は初代赤文の4男で3代赤文の父である本間有武だけではない。）
- ③従来桂鷺州同人といわれていた桂正長銘は光長本人でなく弟子の銘の可能性はある。
- ④桂雲軒の4男南山の名は保光、忠吾。（「遊洛斎赤文考」、「刀装小道具講座6巻」では南山は光保と記載されていた。）
- ⑤従来、赤文は桂雲軒の次男と記載されていたが、桂雲軒の2男に東京の研師に修行にでた竹谷義明という人がいたことが新たに分かった。赤文は桂雲軒の3男であった。

⑥赤文の師匠は元来不明とされていたが、初め村上で兄の鷲州についた後、東都にでて玉川政春の元で修行したのであった。しかし、遊洛齋の号から想像できるように京都へ修行に行ったかどうかは相変わらず不明である。

⑦遊洛齋赤文子正珉は従来詳細不明の金工として述べられていたが赤文は正珉と号す、との記載があり推測の域を出ないが、初代赤文の若銘の可能性はある。

⑧今回の資料にはないが、桂光友は従来詳細不明の金工として述べられていたが、一明との合作の脇差拵が存在している、一明と同時代の越後桂派の金工であったらしい。はじめ鷲州の弟子でのちに東竜齋清寿の門に入ったという。

⑨桂姓を桂野姓に改めたのについては、「庄内金工の研究」には3代赤文が「明治初年の戸籍吏が誤って野一字添加して書付けた以来、訂正の必要もないと桂野と云っていると云う。」と答えたとあり。しかし、「遊洛齋赤文考」ではこれに否定的で、庄内藩での赤文を登庸の際に課せられた蟻通しの宮図鏝の製作の際（文政6か、7年）すでに桂野姓であったことは明らかだと記載がある。私は赤文が桂野と改姓した時期は鶴岡酒井侯にお抱えとなった文政7年ころと思われる、それを裏付ける赤文が書いた南山への手紙が残っている、しかし改姓の理由は相変わらず不明である。

⑩今回、元来不詳とされていた、雲軒、鷲州、南山、一明の没した年と年齢が渡辺氏の書類からわかってきた。しかし、そのなかで南山の没年は明治6年75歳で没したという説があるが、疑問である。肖像画に赤文の行年を86才と南山本人が記すためには少なくとも初代赤文が没する明治8年までは生きていないといけないのではなかろうか。今後の研究が進み明らかになることを期待する。

越後桂派は桂野赤文のルーツである金工一派である。彼らが昔活躍した現在の新潟県村上市は私の仕事上の地元でもある。長年思いを募らせていた彼らの詳細が少しでもわかると愛好家としてはうれしい限りである。



<正長 龍虎図 鏝>

一、先代は破家之氣は皆
 以後は先世ありて方受
 由は目録に詳しき由あり
 皆く之を以て其の由あり
 家系圖に詳しき由あり
 見し抑桂家先祖
 足利と利と末葉長し
 越後師出船郡関桂
 下村上城下下成依村土
 住人鑄物好めりて依京
 公信後寛景し門入銘

公信後寛景し門入銘
 桂雲軒寛敬号二代
 宗二東郡公初菊園統
 師光行不月一光行
 二代光朝若うりて
 打越圓花弘壽任
 弘善不月一市谷埋忠
 加三喜就門師下西
 指をうりて学共後又
 召黒入て改依鑄
 号共以東郡國以妻
 了野割之性問子
 足利新田坂田桂同
 桂成下言依之性問子

足利新田坂田桂同
 改國一少了政隨宗
 村上鑄物師元祖
 足利性桂下改
 定二
 初代京後寛景
 門入桂雲軒
 寛敬下
 光長
 二代京三銘鑄所軒
 春編亨松齋軒
 富安洞又隆之也
 桂成下言依之性問子

義明 二男 東郡 神田 永富
 研師也 名 十藏
 三男 酒井 廣御袍
 桂野 正藏 桂野 正藏
 四男 忠六
 北條 子 南内 鎖
 保光
 元祖 延三 三代 明
 一明 也
 元祖 延三 三代 明
 二 代 崇二 一 代 信子
 年 次 誘

一明 也
 光長
 初 理 水 軒 末 文 俊
 東 郡 初 一 桂 野 正 藏
 三 男 子 崇 二 代 信 子
 四 男 子 崇 二 代 信 子
 南 山
 下 北 師 之 弟 子 崇 二 代 信 子
 三 男 子 崇 二 代 信 子
 二 男 子 崇 二 代 信 子
 一 男 子 崇 二 代 信 子
 一 明 也

一 南 山
 三 男 子 崇 二 代 信 子
 二 男 子 崇 二 代 信 子
 一 男 子 崇 二 代 信 子
 一 明 也
 三 男 子 崇 二 代 信 子
 二 男 子 崇 二 代 信 子
 一 男 子 崇 二 代 信 子
 一 明 也
 三 男 子 崇 二 代 信 子
 二 男 子 崇 二 代 信 子
 一 男 子 崇 二 代 信 子
 一 明 也